

同志社大学

2020 年卒業論文

議題：大学生の一人行動と友人関係の関連性について

社会学部社会学科

学籍番号：1109171065

氏名：坂上みなみ

指導教員：立木茂雄

本文の総文字数：20,765

要旨

論題：大学生の一人行動と友人関係の関連性について

学籍番号：1109171065

氏名：坂上みなみ

近年では個人化が進み、無理して誰かと関わらなく済むようになったが、家族や職域の人との繋がりさえ結び続けることが難しくなっている。そして、身近で「ぼっち」という言葉がよく聞かれるくらい、一人であることを気にする傾向がみられる。そのような中で、近年、若者にとって、友人と過ごすことは、家族と過ごすことより充実感があるくらい、重要なものとなっている傾向もみられる。そのような友人関係に一人行動に対して寛容にさせるものがあるのではないかと考えた。そこで、周囲から理解されているなどの友人関係の心の拠り所さや、友人関係の満足感があれば、一人行動に対して寛容になるのではないかと仮説を立て、量的調査を行った。その結果、友人関係の心の拠り所度が高いと、一部の一人行動に対する意識項目の否定感が少し低いことがわかった。また友人関係の満足度が高いと、一部の一人行動に対する意識項目の否定感が少し低いこともわかった。

キーワード： 個人化，一人行動，友人関係

目次

1 はじめに	4
2 先行研究	4
2.1 一人行動について	4
(1)個人化	4
(2)「ぼっち」とは何か	5
(3)どのような状況がひとりぼっち恐怖を生むのか	5
(4)ひとりぼっち許容度と家族意識	6
2.2 若者にとっての友人関係	6
(1)友人関係の重要性	6
(2)消費社会の個人化の影響	6
(3)中学生から大学生への友人意識の変化	7
2.3 オリエンテーションについて	8
(1)人との付き合い方	8
(2)オリエンテーション	8
3 本研究の目的と方法	8
3.1 本研究の目的	8
3.2 方法	9
4 結果	13
4.1 度数分析	13
4.2 一人行動と友人関係の重回帰分析	20
(1)ひとりぼっち許容度と友人関係の関連	20
(2)一人行動に対する意識項目と友人関係の関連	20
4.3 オリエンテーションに関する結果	23
(1)オリエンテーション内容別での、オリエンテーションに対する意識の違い	23
(2)オリエンテーションと友人関係の重回帰分析	24
5 考察	25
5.1 度数分析の考察	25
5.2 一人行動と友人関係の重回帰分析の考察	25
(1)ひとりぼっち許容度と友人関係の関連の考察	25
(2)一人行動に対する意識項目と友人関係の関連の考察	26
(3)性差について	27
5.3 オリエンテーションに関する結果の考察	27
(1)オリエンテーション内容別での、オリエンテーションに対する意識の違い	27
(2)オリエンテーションと友人関係の重回帰分析の考察	28
6 結論	28
7 謝辞	29
参考文献	30

1 はじめに

ひとりで何かをする「ひとり〇〇」という言葉がある。たとえば、ひとりでカラオケに行く、「ひとりカラオケ」や、ひとりで焼き肉に行く、「ひとり焼き肉」がある。また、ひとりでゆっくり旅に出たり、趣味に没頭したりすることが好まれるようになっている。このように、「ひとり」に対して、肯定的に捉えられるようになってきている。

しかし、一方、若者の間でひとりぼっちの略語「ぼっち」という言葉がよく使われている。この「ぼっち」は否定的な意味で捉えられ、対人関係の悩みの種となりうる。私自身の経験からすると、この言葉は大学に入ってから、意識するようになった。大学に入りたての1回生の間は一人でいることに不安感があり、自分は「ぼっち」だと自覚することがあったからだ。また、そのような中、一人で食事をするところを見られたくないという気持ちもあった。

小学校～高校までは、クラスという数十人の人間が詰め込まれた環境で過ごし、また行事・イベントがあるため、直接的な人との付き合いは免れない。しかし、大学は基本的にある特定のクラスというものは存在しないので直接、人と接するという機会は自分からつかみにいかない限りないと思う。つまり、この状況の変化によって、「ぼっち」と感じられるのではないだろうか。

また、「ぼっち」と言う人、言われる人は、完全に友達がないというわけではないと考える。朝日新聞記事データベースに「ぼっち」に関する記事があった。そこでは、「ぼっち」はごく普通に使われる言葉で、友達がいる人でも単純に一人のときに使うとあり、他者から「ぼっち」と言われる前に、自分から「ぼっち」宣言するという予防線としての働きをもつと述べられている(朝日新聞記事データベース 2014)。つまり、「ぼっち」というのは個人のコミュニケーション能力が原因で友達がない人に対してのみ使われるのではない。周囲の状況によって、誰しもが経験するのではないかと考えた。

ひとりぼっちであることを悩む大学生は多いようで、食堂のテーブルに仕切りを付けた「ぼっち席」の設置など、大学側のサポートが要請されることもある。また大学側によるピアサポートの一環として、オリエンテーションがある。同志社大学でもオリエンテーションとして、4月の月上旬に新1回生を集めて行う親睦会がある。筆者自身もこのオリエンテーションで、友人ができた経験がある。つまり、大学側から用意されたオリエンテーションが、その後の人間関係に影響を与えている可能性がある。そして、このオリエンテーションは、学部・学科によって、食事会などをして、半日で行われるものや、1泊2日で行われるものがある。そこで、オリエンテーションの内容によって、友人関係の構築に変化はあるのかについて調べたいと思う。

以上のことから、本論文では、どうすれば、一人行動に対する意識が変化するのか、オリエンテーションの人間関係への影響はあるかの2点に注目していく。

2 先行研究

2.1 一人行動について

(1)個人化

まず、人が孤立しやすくなっている状況について述べる。ベックの理論をまとめた伊藤美

登里の文献には次のようにある。人は伝統的な社会形態、紐帯から解き放たれるようになり、家族や職域という中間集団が相互扶助や生活のリスクの緩衝剤としての役割を担うようになった。しかし、その中間集団ですら弱体化してしまうようになったとベックが述べている、とある（伊藤 2017）。このように人の紐帯が弱くなり、人が孤立しやすくなる状態になったと考えられる。また石田光規によると、次のように述べている。選択的關係が主流となり、人からの承認が得られるのが難しくなった。1990年代以前では、家族や年齢階層集段などの中にある規範を遵守し、役割を遂行することで得られる同調的承認が主流であった。しかし経済的豊かさによって、現実生活面での共同の必要性は薄れ、個人優先傾向が高まった。そうして、関係を結ぶには努力が必要になり、人と人とを繋ぎとめるには互いの承認と満足さが必要となることになる。こうして、人は孤立しやすくなっているとある（石田 2018）。つまり、無理をして人付き合いをする必要がなくなった一方で、繋がりにくい世の中になった。

(2) 「ぼっち」とは何か

これから、「ぼっち」とは何かについて述べる。「ぼっち」は単に「ひとりであること」を指すのではないと私は考える。一人でいることに否定的な意味を持たせたものだ。その否定的な意味にさせるものは何か述べていく。辻大介によると、一人でいることがさみしいのではなく、人に一人でいるところを見られるのが耐えられないという心情を「ひとりぼっち恐怖」と呼ぶとあった（辻大介 2009）。よって、辻が述べた「ひとりぼっち恐怖」ともない、一人行動を否定的に捉えることが、身近で表現される「ぼっち」に近いと考えた。

(3) どのような状況がひとりぼっち恐怖を生むのか

周囲の状況が「ひとりぼっち恐怖」を高めるということについて述べた藏本知子の論文がある。藏本は女子大学生を対象にひとりぼっち恐怖と世間との関連について研究した。藏本によると、ひとりぼっち恐怖の生起は周囲にいる人間、世間との関係性に影響されるとし、家族や親友などのような近い関係でなく、全くの他人というわけでもない、顔見知り程度の人間が周囲にいるとき、ひとりぼっち恐怖を感じやすいと述べた（藏本 2014）。

この文献で興味深かったのは、ひとりぼっち恐怖を感じるのは周囲に顔見知り程度の人がいるときだと述べている所だ。確かに、電車で一人でいるのは何ともないが、学校で一人でいるときは少し他者の目が気になる。しかし、大学の食堂が入りにくいという人があるように、食堂にお互い誰かも知らない他者しかいなくても、ひとりぼっち恐怖を感じる人がある。ひとりぼっち恐怖を感じる人が自身と比較する他者を顔見知りという基準だけでなく、他の基準に基づいて選んでいるのかもしれないと私は思った。マートンの準拠集団論によると、自己の地位、学歴、年齢、職業と類似した集団と比較して、自己を評価する、とある（マートン 1949）。このことから、「同じ大学生」という点で比較して、自分は孤独であると考えられる可能性があると考えられる。大学生でひとりぼっち恐怖を感じるのは、大学内なのではないだろうかと考えた。

また吉川千尋の論文で行われたアンケート調査で、状況別の孤独感の変化を表していた。娯楽施設（映画館等）などの場所では孤独感を強く感じるとあった（吉川 2012）。人が人と過ごすことが理想とされる場所では孤独感を感じやすいと考えられている。以上のことから

ら、周りの状況によって、一人でいることに否定的になると考えられる。

(4)ひとりぼっち許容度と家族意識

田中美穂はひとりぼっち許容度と家族意識の関連について述べている。田中によると、ひとりぼっちの許容度が高いほど、個人化社会に対応できるとし、「サークル、ゼミは友達と話し合っただけで決める」、「履修を組む時あらかじめどのゼミに入るか決める」など項目で同志社大学の学生のひとりぼっち許容度を測った。そして、家族の絆(家族成員同士の情緒的結合)の強さを測り、家族の絆が強いほど、ひとりぼっち許容度が低いとわかったとある(田中2016)。また、これは田中によって、家族の絆が強いということは家族とのコミュニケーションが濃くなるのが想像されるので、一人になった時に孤立感が強まるのではないかと考察されていた(田中2016)。

私は親密な人が入れば、それが心の居場所となり、ひとりぼっち許容度は高くなると思っていたので、この結果は私にとっては意外であった。そこで、田中は、家族関係とひとりぼっち許容度の相関関係を見ているが、私は友人関係状態がひとりぼっち許容度にどのような影響を与えるのかを調査したいと思う。

2.2 若者にとっての友人関係

(1)友人関係の重要性

先ほど、私は友人関係とひとりぼっち許容度の関連について調査したいと述べたが、理由は若者は友人関係を重要視している傾向があるからである。内閣府政策統括官(共生社会政策担当)の第8回世界青年意識調査によると、次のようにある。日本の青年が最も充実していると感じる時は、「友人や仲間といるとき」が74.6%であり、最も高かった。そして「家族がいるとき」は41.5%であった(内閣府政策統括官(共生社会政策担当)2020)。このことから、日本の青年にとって、友人関係は大切であるということがわかる。また友人関係は家族関係よりも優先されうるものだとも考えられる。そのような若者の友人関係について、見ていく。

(2)消費社会の個人化の影響

ぼっちは若者の間でよく使われることから、現代の若者の対人関係の特徴が「ぼっち」を生み出しているのではないかと考えた。

若者の友人関係と家族関係について中村新太郎は次のように述べている。70年代半ば以降、消費社会が進み、個食化、携帯電話が浸透し、ますます個人化していった。このなかで若者は家族と学校社会の2者からなる「振り子」型から、消費社会が生んだ学校、家族に属さない世界を含めた3者からなる「トライアングル」型に成長様式が変わっていった。そして、この消費社会に所属する同世代の人間との関わりがより重視されるようになった(中西2004)。このことから、消費者社会によって、生活に幅が出て、また人と人がコミュニケーションを取る領域が広がったということが分かる。しかし、携帯電話の普及に関しては、人との関わりという点で見れば、人と関わる機会は増やしたと考えられる。

しかし、中西によると、この構造こそが孤立化を促進させたという述べている。誰とでも、いつでも連絡を取り合えるという状況の中で、誰とも連絡を取り合えないという孤立を生

む可能性がある。ゆえに事前に連絡をする約束をする必要性が生まれた。相手を完全に無視し、死んでしまったかのように透明化してしまえば、簡単に孤立状態を作ることができるようになったと述べられている。(中西 2004)。神野美智男、和田祐一によると、携帯メールに依存していると、孤独感が強いとある。そして携帯メールの使用は孤独の回避を目的としており、女性にその傾向が強くみられた。また友人との親和充実を目的としていたとある(神野,和田 2015)。このことから、携帯電話はいつでも誰かにつながるることができる利点を持ちながら、簡単に孤立も生むことが分かった。ゆえに、事前に約束していないと孤立するとあるので、若者はできるだけ、精神的な安心感を与えてくれるつながりのある友人関係を求める傾向にあるのではないかと私は考える。

(3)中学生から大学生への友達意識の変化

小学校～高校までの環境と、大学の環境は異なる。その環境の違いで、築かれる友人関係も異なるのではないかと私は考えた。

大嶽さと子・多川則子・吉田俊和は中学生と大学生の友人関係の違いに関して、次のように述べている。青年期前期(中学生)と青年期後期(大学生)とでは友人関係の様相が異なるとされるため、ひとりぼっち回避行動についての捉え方の違い、変化を明らかにすることを目的とした。女子大学生に対して、インタビュー形式で、中学生時代の友達関係と、現在の友達関係について聞き出した。その結果、青年期後期には、前期ほどの他者との同調、排斥の傾向がみられなくなった。またひとりぼっち回避行動をとる傾向は青年期後期には弱まることが分かった。また青年期後期に関しては、色んな人と関わって楽しいという意見や、情報収集のためにも重要であると感じていると指摘された(大嶽,多川,吉田 2010)。

つまり中学生時代にはある特定の友人とべったりの関係が強く、他者が踏み込める余地すら与えなかったが、大学生時代には、より広い交友関係を持つことができるようになった。また実際、交友関係が広ければ、広いほど大学生活に必要な過去問やノートをもらったり、就職活動の情報を得ることが可能であると、筆者自身も感じることもある。

もう一つ、大学生の友人関係に関する稲垣応顕・長谷川雅樹・松井理納の文献がある。稲垣・長谷川・松井は次のように述べる。今日の大学生がどのような友人意識を持っているのか把握すること、大学生の友人関係形成およびその深化に有用な知見を見出すことを目的とし、中学生と大学生に対して友達に関する質問をアンケート形式で調査した。その結果、大学生の友人意識は中学生と比べ、支えとなってくれる存在を志向していること、友人関係での悩みは減少し内容も分散していること、狭く深くの関係を結ぶ傾向があること、外面の明るさよりも内面的なふれあいを志向する傾向が高まっていることが分かった。これは、大学生がアイデンティティの形成期にあるため、悩み、不安を開示できるような存在を求めるからであろうと推測している(稲垣,長谷川,松井 2015)。ここでは、大学生は中学生より、狭く深い関係を志向する傾向があるとあり、大嶽が述べたものと少し異なる。

二つの文献から、大学生は常にべったりすることはなくても、精神的な支えとなる友人関係を求めるということが考えられる。これは小学校～高校までのような環境から大学の環境に移行したため、変化したのかもしれないと私は考える。また、大学は人と出会う機会は多いものの、強制的な人との接触はないので、孤立状態は生まれやすいと想定される。ゆえに、このような大学の環境でうまく適応するために、精神的な支えとなるような友人関係を

求める傾向があるのではないかと考えた。よって、この友人関係がひとり行動に対する否定感を弱めることができるのではかと考えられる。

2.3 オリエンテーションについて

(1)人との付き合い方

近年はスマホをいじったり、イヤホンをする若者をよく見かける。私自身も同様のことをしている。美容院も電話ではなく、ネットで予約をすませるようになった。イヤホンをすれば、話しかけられることもないので、自分だけの世界に入れる。つまりこのような機器の普及で現代の若者はますます直のコミュニケーションをとる機会や、その必要性でさえ少なくなっている。余計に苦手意識を持つと考えられる近年では自主的に人間関係を作ろうとしない傾向が出ているようだ。永井徹は青年期においては、お互いを傷つけ合わないよう表面的に円滑な関係を志向する傾向があるため、他者の目を気にしたり、人前で過度に緊張するなどの対人恐怖を感じる人が多いと述べている(永井 1994)。また浅田智彦によると次のように述べられている。状況に応じて、接する友人を選ぶ傾向があり、またその中で様々な人とうまく接するために、空気を読んで行動する繊細さもみられると述べられている(浅田 2006)。このことから、人間関係を築くために努力が必要であり、簡単に築けるようなものではないと思われる。ゆえに、このような状況も一人の要因となって、第3者(大学)からのサポートが必要になったと考えられる。

(2)オリエンテーション

オリエンテーションについて述べる。新入生オリエンテーションに対する学生の評価をテキストマイニングで分析した古田雅明は次のように述べた。2009年に1泊2日の宿泊型、2010年には学生・教員の交流を拡大した1泊2日の宿泊型、2011年は半日のみのオリエンテーションであった。オリエンテーション直後の授業で、アンケート調査した良かった点と悪かった点を年度で比較している。その結果から、オリエンテーションの形式に関わらず、学生同士が知り合いになれることが良い点とされた。そして、学生同士の親密化のために、時間と場所を保証して学生の自主性に任せるのではなく、教員が積極的に働きかけることが必要とされたとあった(古田雅明 2012)。オリエンテーションには学業へのめる機会であったり、人と知り合う機会教員とのコミュニケーションは、大学の授業への期待感を高める機会である。私はオリエンテーションが、学生同士が知り合う機会という点に注目したいと考えている。

同志社大学でも、オリエンテーションは実施されている。レクレーションや食事会を半日かけて行うものや、泊りがけで行うもの、もしくは学校の基本情報の説明会のみのものである。本調査でも、それぞれのオリエンテーション内容で比較し、そのなかで友人関係構築に貢献できているかを調査したい。したがって、私は同じ学部・学科に所属する友人関係の親密性はオリエンテーションの違いによって、現れるのかについて調査したいと思う。

3 本研究の目的と方法

3.1 本研究の目的

私は友人関係とひとりぼっち許容度の関連を調査したいと思う。先行研究では、家族の絆

が高いと、ひとりぼっち許容度が低いという結果となっていた。近年では、若者にとって友人関係の重要性が高いことが分かっている。そこで私は先行研究を踏まえて、次のような仮説を立てる。「心の拠り所となる友人関係が、一人行動に対して寛容にさせる要素となるのではないか。」(仮説①)、「満足度が高い友人関係が、一人行動に対して寛容にさせる要素となるのではないか。」(仮説②)の2つとなる。これを実証すれば、個人化が進む社会でも、満足感がある友人関係、心の拠り所となる友人関係がある方が、個人化社会に適応できるということを言える。

またオリエンテーションと友人関係の関連についても調査したいと思う。先行研究ではオリエンテーションの形式の違いに関わらず、学生同士が知り合う機会になったということが分かっている。それでも、1泊2日のオリエンテーションの方が、人と接する時間が長く人と過ごすことができるので、友人関係を築くことに違いを生むのではないかと考えた。またオリエンテーションが出会いの良いきっかけであったかどうかの差は、内容形式の差で生まれるのではないかと考えた。ゆえに、本調査でもオリエンテーションに関する質問項目を用意し、調査する。オリエンテーションの内容によって、友人関係に何か影響を与えていることが分かれば、人と人の繋がりを築くことが難しい中でも、人間関係を築くための要素が分かると考えられる。

3.2 方法

グーグルフォームを利用して、アンケート調査を実施する。そして対象者は同志社大学の学生とする。これから調査で使用する質問項目について述べる。

まず、一人行動に対する肯定感を測るために、次のような質問項目を準備した。「一人行動が好きだ」、「一人で行動することに不安を感じる事が多い」、「一人でいる人を見ると、寂しい人だと思う」、「自分が一人でいる所を見られるのは嫌だ」、「無理をしてまで、だれかと過ごさなくても良い」という5つの項目である。先行研究で述べた藏本の論文で、他人が一人でいることに対しては否定的な意見を持っていなくても、自分が一人でいることに対しては、否定的な意見を持つことがあるとあった(藏本 2014)。ゆえにこの調査でも、「一人でいる人を見ると寂しい人だと思う」、「自分が一人でいる所を見られるのは嫌だ」という質問項目を加え、どのような結果となるのかを見ていきたいと思う。

表1 一人行動に対する肯定感に関する質問項目

Q2_1一人行動することが好きだ
Q2_2一人で行動することに不安を感じる事が多い
Q2_3一人でいる人を見ると、寂しい人だと思う
Q2_4自分が一人でいる所を見られるのは嫌だ
Q2_5無理をしてまで、誰かと過ごさなくても良いと思う

次に、友達の付き合い方についての質問項目を準備した。これは浅田(2006)の友人の付き合い方に対する質問項目を参考としている。質問項目は「遊ぶ目的によって、一緒に遊ぶ友達を使い分けている」、「友達関係はあっさりしていて、お互い深入りしない」、「できるだけいろんな人と付き合うようにしている」、「いつも友達と連絡をとっていないと不安にな

る」,「友達をたくさん作るように心がけている」,「日頃から接する特定の友人がいる」の5つである。「遊ぶ目的によって、友達を選ぶ」というように選択的関係を志向しているかなどを測る。回答者がどういう付き合い方をしているかによって、一人行動に対しての意識は変化するのではないかと考えている。

表2 友人の付き合い方

Q3_1 遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友達を使い分けている
Q3_2 友達関係はあっさりしていて、お互い深入りしない
Q3_3 できるだけ、いろんな人と付き合うようにしている
Q3_4 いつも友達と連絡を取っていないと不安になる
Q3_5 友達をたくさん作るように心がけている
Q3_6 日頃から接する特定の友人がいる

大学内での一人行動の意識について測る。ひとりぼっち許容度(田中 2016)を参考にした。これは田中(2016)が大嶽のひとりぼっち行動回避規範をアレンジしたものである。ひとりぼっち行動回避規範は中高生向けの項目であったのだが、田中が大学生向けの項目に作成した。このひとりぼっち許容度の質問では、大学内での生活に対して、誰かと共に過ごすべきかどうかを尋ねている。ひとりぼっち許容度の質問項目は次のようになる。「サークルなどの集まりに参加する際、誰かと誘い合う方が良い」、「新たな環境に身を置いたら、なるべく早いうちに、一緒にいてくれる友達を探すべきだと思う」、「誰かと約束したうえで一緒に帰るべきだ」、「休み時間を友人と一緒に過ごすべきだ」、「昼休みに友達と一緒に昼食をとる方が良い」、「教室に誰かと一緒に行く方が良い」、「学習支援センターや教授の研究室に用がある時、誰かについてきてもらいたい」、「友達と誘い合ってトイレに行く方が良い」、「履修を決める時、あらかじめ友達と一緒に用を打合せしておく方が良い」、「どのサークルやゼミに入るかを決める時、できるだけ友達と同じになるようにしたい」、「登校する時、どこかで友達と待ち合わせした方が良い」の11項目となる。以上の質問項目によって、大学内で一人行動することに対する意識を測る。

表3 ひとりぼっち許容度

-
- Q4_1サークルなどの集まりに参加する際、誰かと誘い合う方が良い
- Q4_2新たな環境に身を置いたら、なるべく早いうちに、一緒にいてくれる友達を探すべきだと思う
- Q4_3誰かと約束したうえで一緒に帰るべきだ
- Q4_4休み時間を友人と一緒に過ごすべきだ
- Q4_5昼休みに友達と一緒に昼食をとる方が良い
- Q4_6教室に誰かと一緒に行く方が良い
- Q4_7学習支援センターや教授の研究室に用がある時、誰かについてきてもらいたい
- Q4_8友達と誘い合ってトイレに行く方が良い
- Q4_9履修を決める時、あらかじめ友達と一緒にできるように打合せしておく方が良い
- Q4_10どのサークルやゼミに入るかを決める時、できるだけ友達と同じになるようにしたい
- Q4_11登校する時、どこかで友達と待ち合わせした方が良い
-

同じ学部・学科内の友人関係について測る。まず、友人関係の心の抛り所度を測るために、大久保智生(2010)の学校適応度を測る質問項目を参考にした。これは学校適応感を心理的居場所感、被受容感、課題の充実感で計測している。私は特にこの心理的居場所感、被受容感の部分を参考にした。また、先行研究より大学生は精神的な支えとなるような友人を求める傾向があると分かったので、「悩みを相談できる」、「悩みを相談されることがある」という項目を作成し、加えた。以上のことをもとに、友人関係の心の抛り所度を測ろうと思う。項目は次のようになる。「周りから理解されていると思う」、「受け入れられていると感じる」、「自分の悩み事などを相談することができる」、「ありのままの自分を出せていると思う」、「周囲から頼られていると感じる」、「友人から悩み事を相談されることがある」、「友人から関心を持たれていると思う」の8つである。

また、石田によると、現代の人間関係のつながりは互いの承認、満足によって保たれるとあった(石田2018)。ゆえに「友人関係に満足している」という友人関係の満足度に関する質問も用意した。以上にある、心の抛り所度、満足度、時間の3つの要素で、友人関係項目を準備した。

表4 友人関係項目

Q5_1同じ学部・学科内の人との付き合いがある

Q5_2今、学部・学科の友人に週何回会う機会がありますか。数字（0～7）を記入してください。

Q5_3同じ学部・学科内の人とは授業がある時にしか会わない

Q5_4携帯電話（LINEなど）で連絡取り合う頻度はどれくらいですか

Q5_5周りから理解されていると思う

Q5_6受け入れられていると感じる

Q5_7自分の悩み事などを相談することができる

Q5_8ありのままの自分を出せていると思う

Q5_9周囲から頼られていると感じる

Q5_10友人から悩み事などを相談されることがある

Q5_11友人から関心を持たれていると思う

Q5_12友人関係に満足している

最後にオリエンテーションに関する質問国目を準備した。これはオリエンテーションの内容についての項目を作成した。学部学科によっては1泊2日のお泊りであったり、半日かけて行われる食事会やレクリエーションがある。そして、オリエンテーションであった人とは今でも付き合いがあるか、知り合うための良いきっかけになったかなどを聞く。こうして、オリエンテーションに対する意識がオリエンテーションの内容（長さ）によって異なるのかを調べる。ゆえに、オリエンテーションの参加有無、経験したオリエンテーションの内容を聞く質問項目を作成した。

オリエンテーションに対する意識に関する質問を次のように作成した。「オリエンテーションで知り合った人とは今でも付き合いがある」、「オリエンテーションは大学の人と知り合うための良いきっかけになったと思う」、「オリエンテーションがなくても、学部・学科の友人を作ることは容易だと思う」という3つである。

表5 オリエンテーションに関する項目

Q6_1オリエンテーションはありましたか

Q6_2オリエンテーションに参加しましたか

Q6_3オリエンテーションの内容について教えてください

Q6_4オリエンテーションで知り合った人とは今でも付き合いがある

Q6_5オリエンテーションは大学の人と知り合うための良いきっかけになったと思う

Q6_6オリエンテーションがなくても、学部・学科の友人を作ることは容易だと思う

そして最後にフェイス項目について述べる。本調査では、性別、学年の他に、アンケート回答者自身が同志社大学系列の高校を卒業（内部進学）しているか否か、浪人経験者であるかを答えてもらう。同志社大学系列の高校出身者なら大学内に高校からの馴染みの人が、同

志社大学に多くいる可能性がある。そして、浪人経験者は周りとは年齢が違うということがある。そのような状況によって友人関係の構築に変化があるのか見るために作った項目である。

表6 フェイス項目

Q1_1あなたの性別を教えてください。
Q1_2あなたの学年を教えてください
Q1_3所属する学部学科について教えてください
Q1_4以下にあてはまるものを一つ選んでください
Q1_5浪人経験者ですか

4 結果

4.1 度数分析

調査の結果、同志社大学の学生を中心に102名から、回答を得ることができた。男性41.2%、女性58.8%この回答を数値化し、統計ソフトSPSSを用いて、分析する。大学2回生は15.7%、大学3回生は31.4%、大学4回生は51%、その他は2%となった。その他には大学院生、大学5回生と回答した者である。大学1回生からは回答を得ることができなかった。

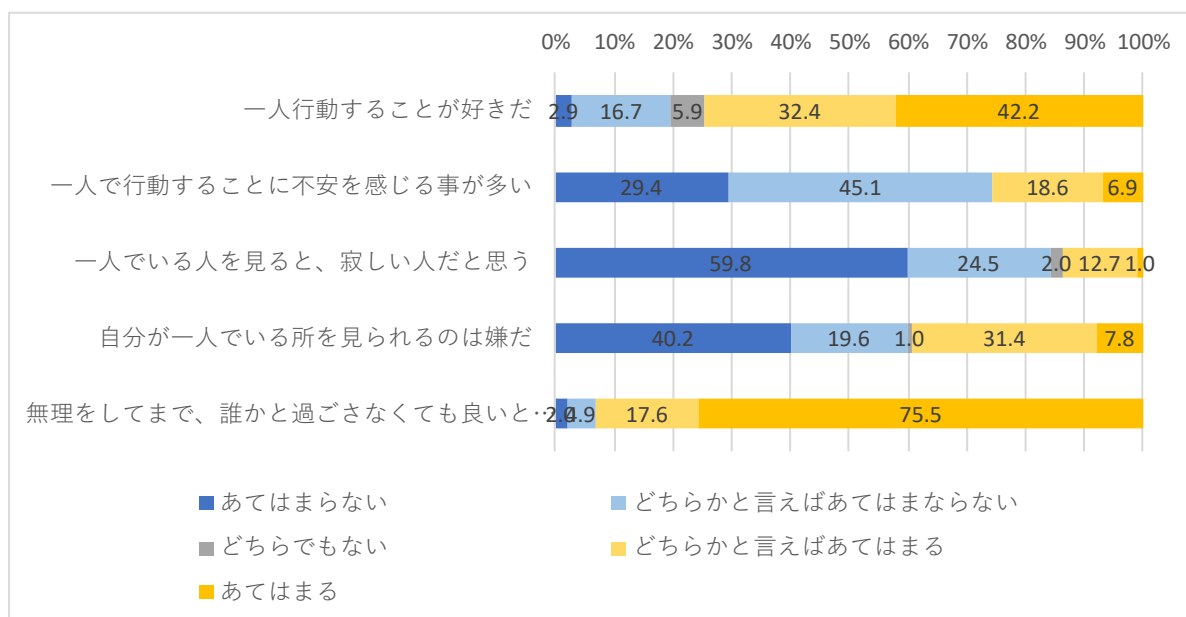


図1 一人行動に関する項目の回答割合 (N=102)

一人行動に関する項目の回答は図1の示すとおりになる。「一人行動することが好きだ」、「無理をしてまで、誰かと過ごさなくても良いと思う」という項目は肯定意見の割合が目立っていた。「一人行動することが好きだ」に対する肯定意見は約74%であり、「無理をしてまで、誰かと過ごさなくても良いと思う」に対する肯定意見は約93%であった。

「一人で行動することに不安を感じる事が多い」という項目に対する肯定意見は約25%

であった。「一人でいる人を見ると、寂しい人だと思う」という項目に対して、否定意見が約84%であった。「自分が一人でいるところ見られるのは嫌だ」という項目に対して、嫌だという意見（肯定意見）は約38%であった。

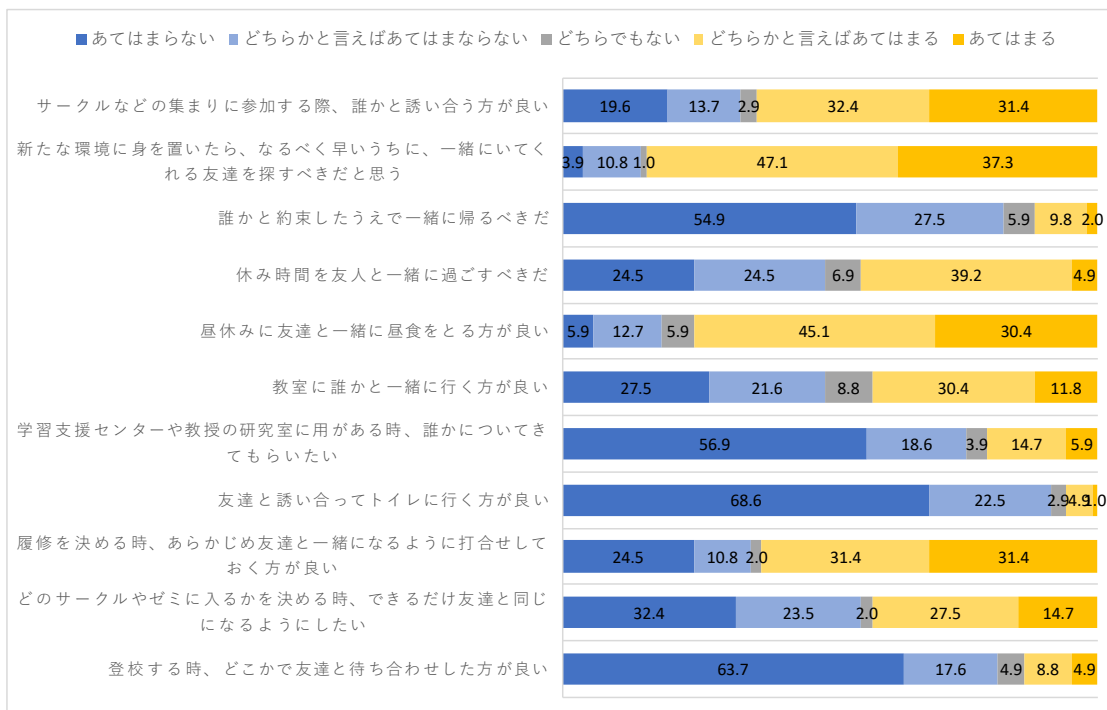


図2 ひとりぼっち許容度の質問項目の回答割合 (N=102)

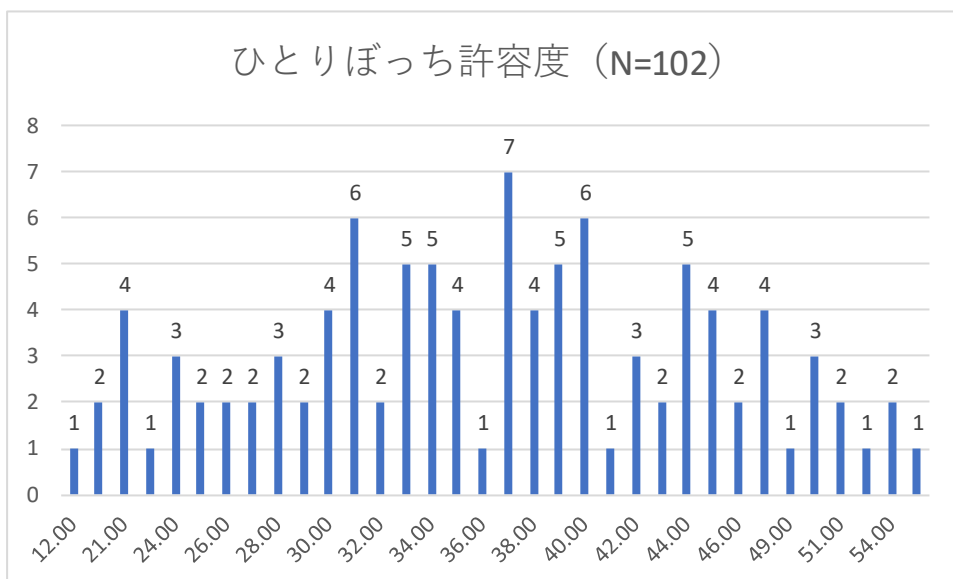


図3 ひとりぼっち許容度の度数

「新たな環境に身を置いたら、なるべく早いうちに、一緒にいてくれる友達を探すべきだと思う」、「昼休みに友達と一緒に昼食をとる方が良い」という項目は約75%以上の肯定意見で占めていた。そして、「サークルなどの集まりに参加する際、誰かと誘い合う方が良い」、

「履修を決める時、あらかじめ友達と一緒にになるようにうち合わせしておく方が良い」という項目では約 60%の肯定意見が占めていた。

一方、否定意見に関しては、「誰かと約束したうえで一緒に帰るべきだ」、「学習支援センターや教授の研究室に用がある時、誰かについてきてもらいたい」、「友達と誘い合ってトイレに行く方が良い」、「登校する時、どこかで友達と待ち合わせした方が良い」、「大学内を一人で行動するのは不安である」という項目に対して、約 75%以上が否定意見で占めていた。

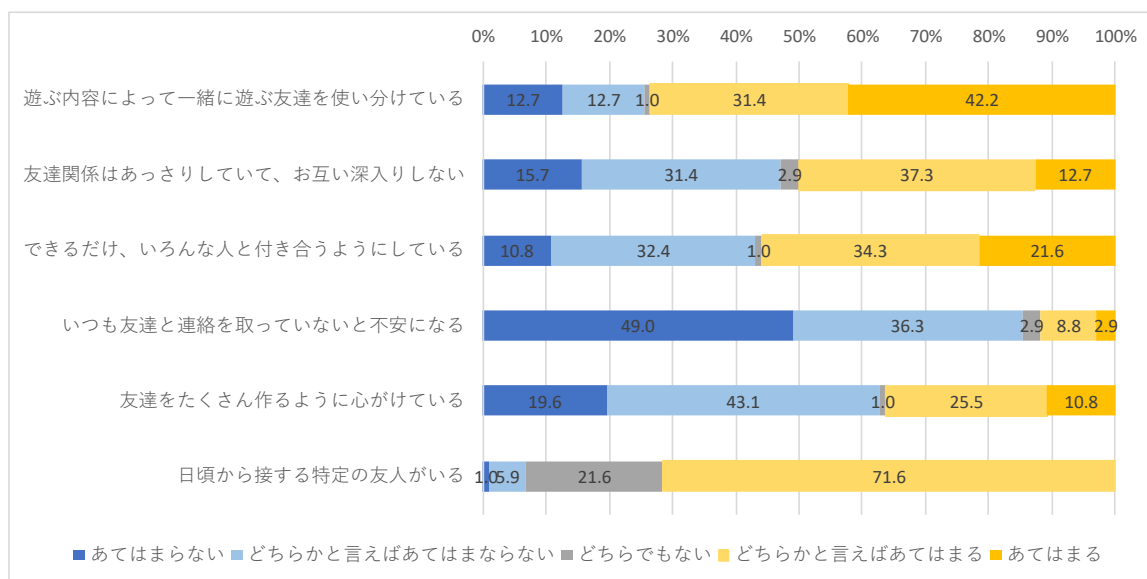


図4 付き合い方の質問項目の回答割合 (N=102)

「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友達を使い分けている」という項目に対して、約 73%の肯定意見が占めている。「日頃から接する特定の友人がいる」という項目に対して、肯定意見が約 93%を占めている。「いつも友達と連絡を取っていないと不安になる」という項目に対して、約 85%の否定意見が占めている。「友達関係はあっさりしていて、お互い深入りしない」という項目では約 50%が肯定意見で、約 47%が否定意見であった。

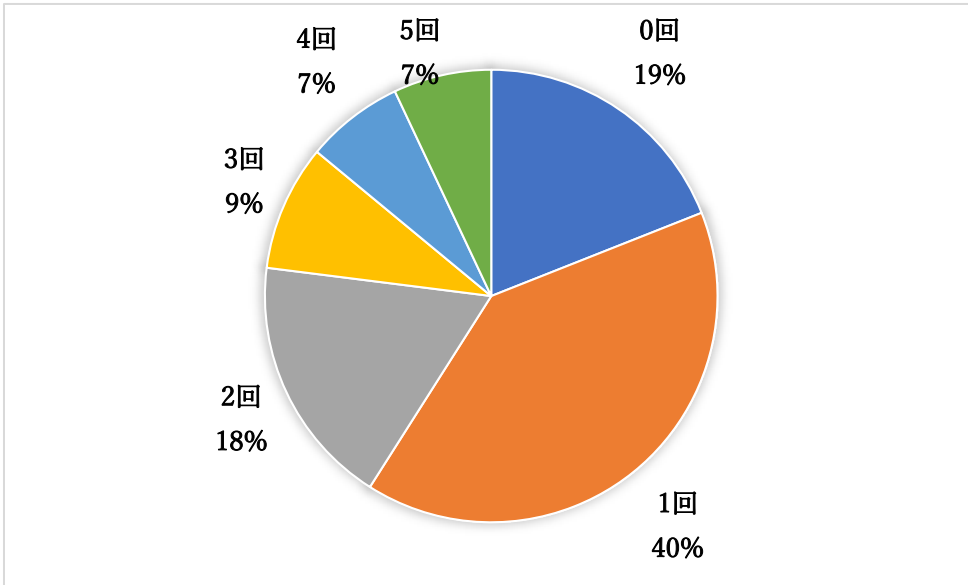


図5 同じ学部・学科の友人に1週間で会う回数 (N=100)

今、週何回、学部・学科の友人と会う機会があるかという質問に対して、上の図のような回答が得られた。最も多いのは1回という回答で、40%を占めていた。

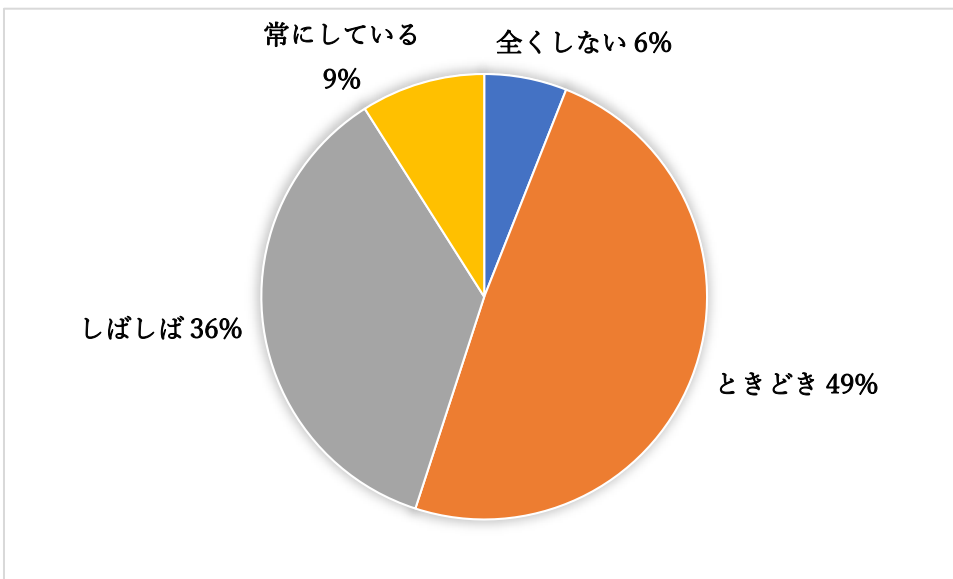


図6 携帯電話 (LINE など) で連絡を取り合う頻度 (N=100)

上は携帯電話を通して、連絡を取り合う頻度について尋ねた結果である。「ときどき」とい回答が最も多く、約49%を占めた。「全くしない」という回答は約6%であるので、約94%は連絡を取り合うということが分かる。

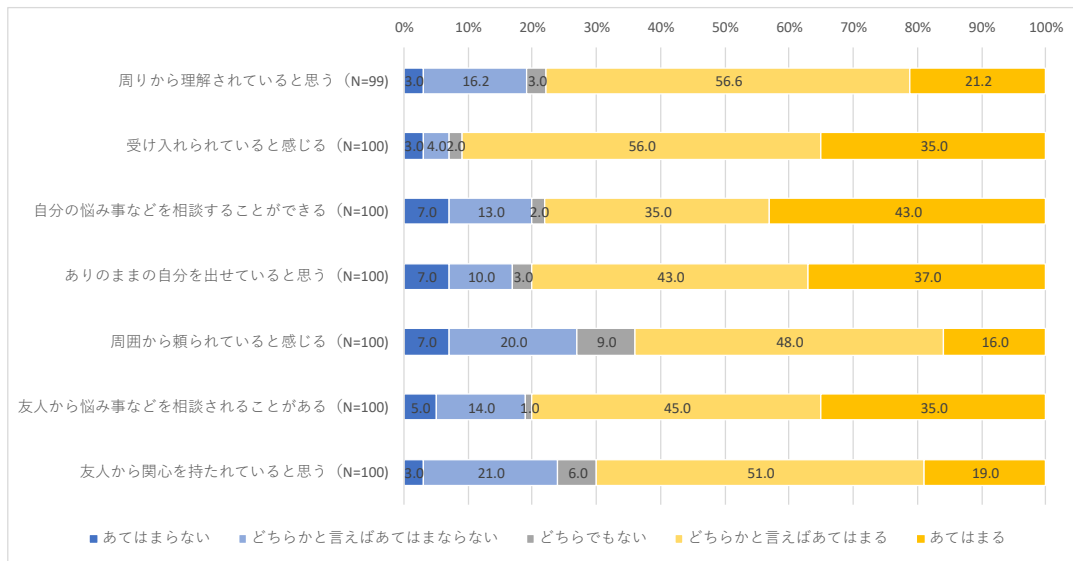


図7 友人関係心の拠り所度に関する質問項目の回答割合

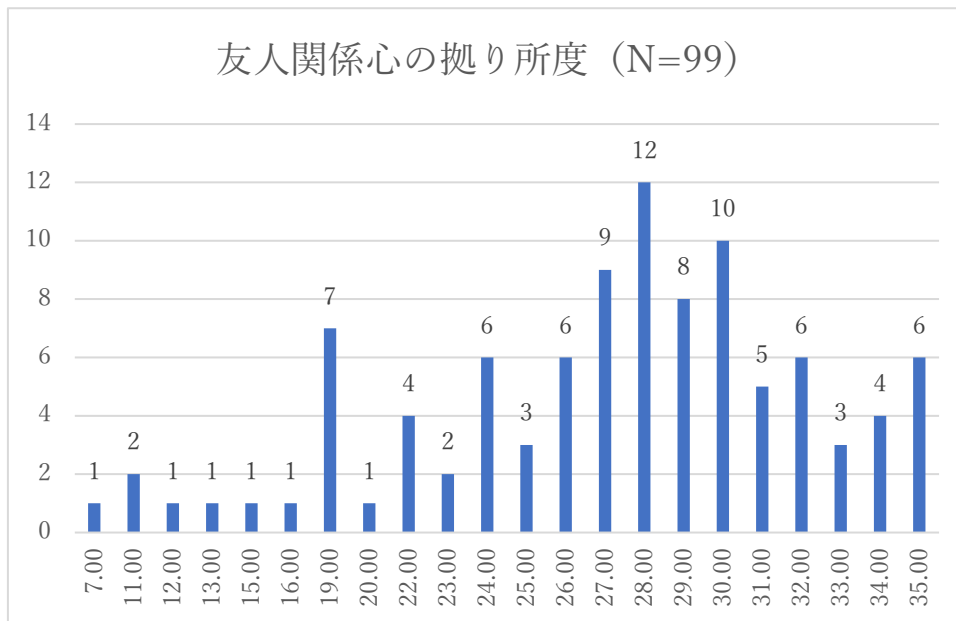


図8 友人関係心の拠り所度の度数

「周りから理解されていると思う」、「受け入れられていると感じる」、「自分の悩み事などを相談することができる」、「ありのままの自分を出せていると思う」、「友人から悩み事などを相談されることがある」という4つの項目では、肯定意見が約75%以上を占めている。そして、「周囲から頼られていると感じる」という項目では、肯定意見が約70%、「友人から関心を持たれていると思う」では、肯定意見が約68%を占めていた。以上のように、いずれの項目でも、肯定意見に偏っている結果となった。

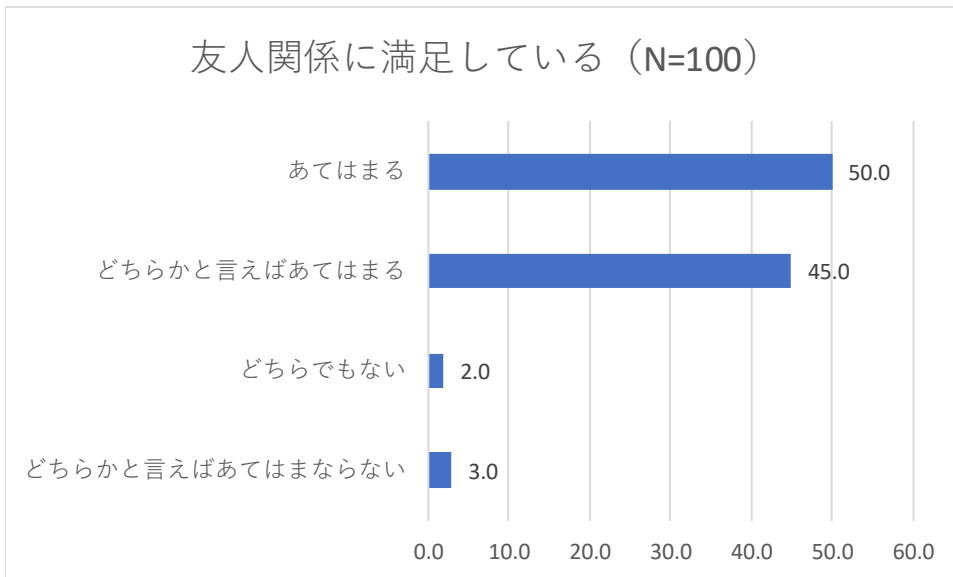


図9 友人関係満足度に関する質問項目の回答割合 (N=100)

図9より、「友人関係に満足している」という項目では、肯定意見が約95%を占めているとわかった。

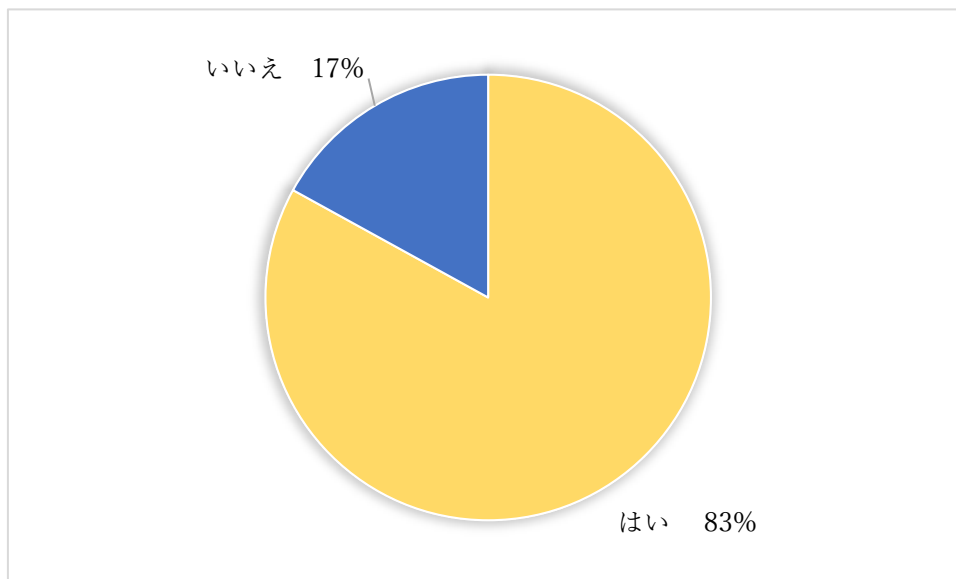


図10 「オリエンテーションに参加しましたか」の回答の円グラフ(N=102)

「オリエンテーションはありましたか」という項目では、「はい」が約88%、「いいえ」が約12%であった。そして、「オリエンテーションに参加しましたか」という項目では、「はい」が約83%、「いいえ」が約17%であった。

オリエンテーションに参加した人の中で、どのようなオリエンテーションに参加したかのかを下の図12に示す。

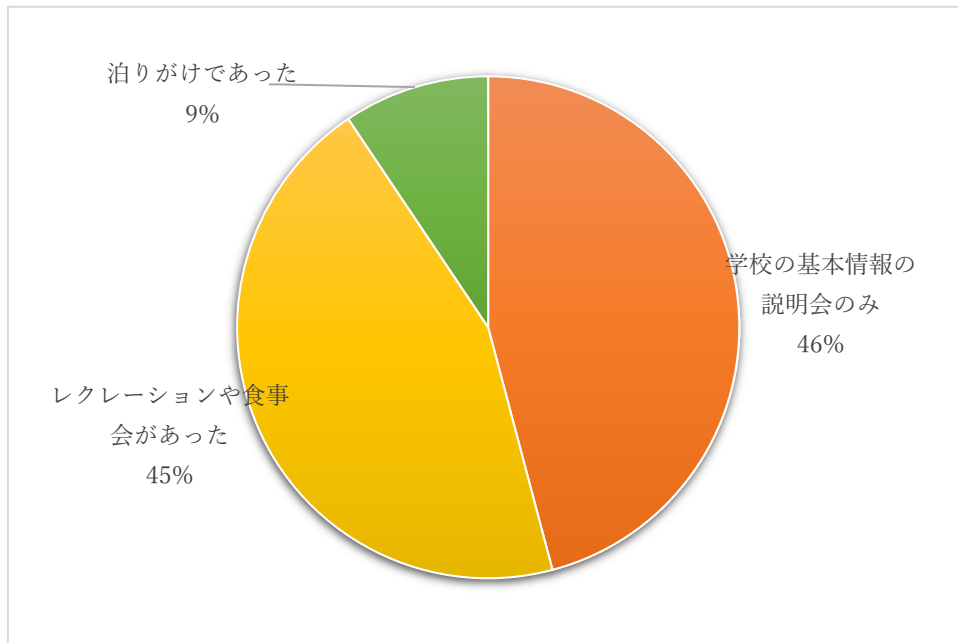


図 12 経験したオリエンテーションの内容の円グラフ (N=85)

「学校の基本情報の説明会のみ」という回答は約 46%、「レクリエーションや食事会があった」は約 44%、「泊りがけであった」は約 10%であった。

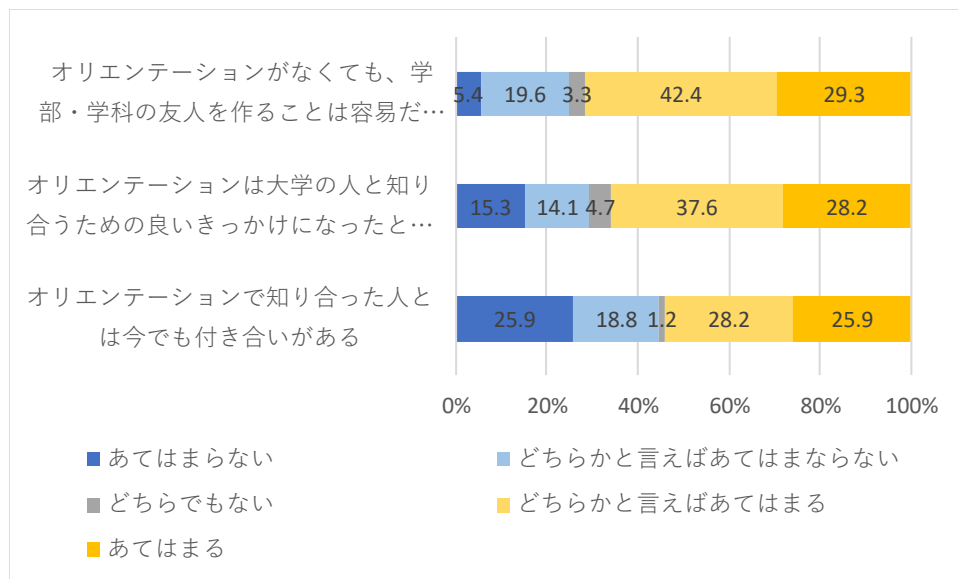


図 13 オリエンテーションの印象に関する質問項目の回答割合 (N=85)

「オリエンテーションで知り合った人とは今でも付き合いがある」という項目では、肯定意見が約 55% 占めた。「オリエンテーションは大学の人と知り合うための良いきっかけとなったと思う」という項目では、肯定意見が約 67% 占めている。「オリエンテーションがなくても、学部・学科の友人を作ることは容易だと思う」という項目では、肯定意見が約 72% 占めている。

4.2 一人的行動と友人関係の重回帰分析

(1) ひとりぼっち許容度と友人関係の関連

表7 重回帰分析 従属変数 「ひとりぼっち許容度」

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数
あなたの性別を教えてください。=男	-2.355	1.865	-0.129
内部進学者ダミー=同志社大学系列の高校の出身者（内部進学）	0.358	2.153	0.018
浪人経験者ですか=はい	1.693	2.407	0.074
今、学部・学科の友人に週何回会う機会がありますか	-0.504	0.685	-0.081
同じ学部・学科内の人とは授業がある時にしか会わない	0.496	0.633	0.082
携帯電話（LINEなど）で連絡取り合う頻度はどれくらいですか	-2.512	1.329	-0.208 *
友人関係に満足している	2.291	1.421	0.174
友人関係心の抛り所度	-0.178	0.170	-0.115

調整済みR2乗 0.093

p***<1, p**<5, p*<10

N=99

ひとりぼっち許容度と友人関係の関係性について明らかにするため、重回帰分析を行った。友人関係に関する項目を独立変数とした。また、ひとりぼっちに対する不安は、周りの人と比べた時に生まれるのではないかと思い、内部進学ダミー、浪人経験ダミー等の出身に関する項目、性別ダミーを独立変数に加えた。

上の表は、「ひとりぼっち許容度」を従属変数として、重回帰分析を行った結果である。調整済み R2 乗は 0.093 であった。「携帯電話（LINE など）で連絡を取り合う頻度はどれくらいですか」は非標準化係数が-2.512 であり、5%水準で有意な結果であった。

しかし、友人関係心の抛り所度は有意な結果が得られなかった。また性別、内部進学であるか、浪人経験者であるかどうかに関しても、有意な結果は得られなかった。

(2) 一人的行動に対する意識項目と友人関係の関連

ひとりぼっち許容度と同様に、一人的行動に関する意識の項目と友人関係の項目の関係性を見ていく。一人的行動に関する意識の項目は「あてはまる」を5点～「あてはまらない」1点としていて、得点が高いほど、その質問項目の内容について強くあてはまるということを表している。独立変数は友人関係に関する項目、性別ダミー、内部進学ダミー、浪人経験ダミーとなる。

「一人的行動することが好きだ」、「無理をしてまで、誰かと過ごさなくても良いと思う」を従属変数にし、回帰分析したところ、特に有意な結果が得られなかった。「一人で行動することに不安を感じることが多い」、「一人でいる人を見ると寂しい人だと思う」、「自分が一人でいるところを見られるのは嫌だ」という3つの項目を従属変数にして、重回帰分析したところ、有意な結果が得られたので、以下に示す。

表8 重回帰分析 従属変数「一人で行動することに不安を感じることが多い」

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数
あなたの性別を教えてください。 =男	-0.124	0.263	-0.048
内部進学者ダミー=同志社大学 系列の高校の出身者（内部進 学）	0.365	0.303	0.132
浪人経験者ですか=はい	0.150	0.339	0.047
今、学部・学科の友人に週何回 会う機会がありますか	-0.030	0.097	-0.034
同じ学部・学科内の人とは授業 がある時にしか会わない	-0.085	0.089	-0.100
携帯電話（LINEなど）で連絡取 り合う頻度はどれくらいですか	0.358	0.187	0.211 *
友人関係に満足している	-0.365	0.200	-0.197 *
友人関係心の抛り所度	-0.052	0.024	-0.239 **
調整済みR2乗 0.086			
p***<1, p**<5, p*<10			
N=99			

上の表8は「一人で行動することに不安を感じることに不安を感じるが多い」を従属変数として、重回帰分析をした結果である。調整済みR2乗は0.086であった。「携帯電話(LINEなど)で連絡を取り合う頻度はどれくらいですか」、「友人関係に満足している」がどちらも10%水準で有意であった。そして「友人関係心の抛り所度」は5%水準で有意であった。「携帯電話(LINEなど)で連絡を取り合う頻度はどれくらいですか」の標準化係数は0.211であり、「友人関係に満足している」が-0.197、友人関係心の抛り所度は-0.239であった。よって、この中では少しの差であるが、「友人関係心の抛り所度」が最も大きい影響を与えているとわかった。

表9 重回帰分析 従属変数「一人でいる人を見ると寂しい人だと思う」

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数
あなたの性別を教えてください。 =男	0.084	0.208	0.039
内部進学者ダミー=同志社大学 系列の高校の出身者（内部進 学）	0.391	0.240	0.169
浪人経験者ですか=はい	-0.286	0.268	-0.107
今、学部・学科の友人に週何回 会う機会がありますか	-0.048	0.076	-0.065
同じ学部・学科内の人とは授業 がある時にしか会わない	-0.162	0.071	-0.229 **
携帯電話（LINEなど）で連絡取 り合う頻度はどれくらいですか	-0.027	0.148	-0.019
友人関係に満足している	-0.706	0.158	-0.458 ***
友人関係心の抛り所度	0.014	0.019	0.080
調整済みR2乗 0.176			
p***<1, p**<5, p*<10			
N=99			

上の表9は「一人でいる人を見ると寂しい人だと思う」を従属変数として、重回帰分析した結果である。調整済みR2乗は0.176であった。「友人関係に満足している」が1%水準で有意であり、「同じ学部・学科内の人とは授業がある時にしか会わない」は5%水準で有意であった。「友人関係満足度」の標準化係数は-0.458であり、「同じ学部・学科内の人とは授業がある時にしか会わない」の標準化係数は-0.229であった。よって、「友人関係に満足している」の方が大きい影響を与えていることがわかった。

表10 重回帰分析 従属変数「自分が一人でいる所を見られるのは嫌だ」

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数
あなたの性別を教えてください。 =男	-0.335	0.309	-0.112
内部進学者ダミー=同志社大学 系列の高校の出身者（内部進 学）	0.267	0.357	0.083
浪人経験者ですか=はい	0.400	0.399	0.108
今、学部・学科の友人に週何回 会う機会がありますか	-0.207	0.114	-0.203 *
同じ学部・学科内の人とは授業 がある時にしか会わない	-0.195	0.105	-0.198 *
携帯電話（LINEなど）で連絡取 り合う頻度はどれくらいですか	0.160	0.220	0.081
友人関係に満足している	-0.219	0.236	-0.102
友人関係心の抛り所度	-0.051	0.028	-0.201 *
調整済みR2乗 0.064			
p***<1, p**<5, p*<10			
N=99			

上の表 10 は「一人でいる所を見られるのは嫌だ」を従属変数として、重回帰分析を行った結果である。調整済み R2 乗は 0.064 であった。「今、学部・学科の友人に週何回会う機会がありますか」、「同じ学部・学科内の人とは授業がある時にしか会わない」、「友人関係心の抛り所度」が 10%水準で有意であった。「今、学部・学科の友人に週何回会う機会がありますか」の標準化係数は-0.203、「同じ学部・学科内の人とは授業がある時にしか会わない」の標準化係数は-0.198、「友人関係心の抛り所度」の標準化係数は-0.201 であるので、わずかではあるが、「同じ学部・学科の人とは授業がある時にしか会わない」の項目の方が最も大きい影響を与えていることが分かる。

そして、いずれの重回帰分析も、性別の影響を有意に示すものはなかった。そして、内部進学であるか、浪人経験者であるかに関しても、有意な結果が得られなかった。

4.3 オリエンテーションに関する結果

(1) オリエンテーション内容別での、オリエンテーションに対する意識の違い

人と出会うための場としてのオリエンテーションに対する意識は、経験したオリエンテーションによって変わるのかを見ていく。

「オリエンテーションで知り合った人とは今でも付き合いがある」、「オリエンテーションは大学の人と知り合うための良いきっかけになったと思う」、「オリエンテーションがなくても、学部・学科の友人を作るとは容易だ」の項目の回答選択肢を「あてはまらない」、「どちらかと言えばあてはまらない」を「あてはまらない」とし、「あてはまる」、「どちらかと言えばあてはまる」を「あてはまる」として、肯定意見と否定意見の2つにまとめた。

表 11 「オリエンテーションの内容について教えてください」と「オリエンテーションで知り合った人とは今でも付き合いがある」のクロス表

		オリエンテーションで知り合った人とは今でも付き合いがある		合計
		あてはまらない	あてはまる	
オリエンテーションの内容について教えてください	学校の基本情報の説明会のみ	47.40%	52.60%	100.00%
	レクレーションや食事会があった	42.10%	57.90%	100.00%
	泊りがけであった	50.00%	50.00%	100.00%

N=83

どのオリエンテーションの内容でも、今でも付き合いがあると答えた人は約 50%であった。3つのオリエンテーションの内容で最も肯定意見の割合が多かったのは、「レクレーションや食事会があった」の約 57%であった。

表 12 「オリエンテーションの内容について教えてください」と「オリエンテーションは大学の人と知り合うための良いきっかけになったと思う」のクロス表

		オリエンテーションは大学の人と知り合うための良いきっかけになったと思う		合計
		あてはまらない	あてはまる	
オリエンテーションの内容について教えてください	学校の基本情報の説明会のみ	32.40%	67.60%	100.00%
	レクレーションや食事会があった	27.00%	73.00%	100.00%
	泊りがけであった	42.90%	57.10%	100.00%
合計		30.90%	69.10%	100.00%

N=83

「オリエンテーションが大学の人と出会う良いきっかけとなったと思う」に対して、「レクレーションや食事会があった」の肯定意見が約 73%であった。「泊りがけであった」の場合は約 57%であった。

表 13 「オリエンテーションの内容について教えてください」と「オリエンテーションがなくても、学部・学科の友人を作ることは容易だと思う」のクロス表

		オリエンテーションがなくても、学部・学科の友人を作ることは容易だと思う		合計
		あてはまらない	あてはまる	
オリエンテーションの内容について教えてください	学校の基本情報の説明会のみ	13.90%	86.10%	100.00%
	レクレーションや食事会があった	28.90%	71.10%	100.00%
	泊りがけであった	28.60%	71.40%	100.00%

N=83

いずれのオリエンテーションでも、オリエンテーションがなくても、学部・学科の友人を作ることは容易だと答えた人は約 70%以上いた。学校の基本情報の説明会のみ場合は、約 86%の人が「あてはまる」と答えている。

以上の 3 つのクロス表から、オリエンテーションの内容による差は生じていないことが分かった。全体として、オリエンテーションに対して、出会いの良いきっかけと捉えている割合が大きいですが、別になくても困らないという可能性があることが分かった。

(2)オリエンテーションと友人関係の重回帰分析

オリエンテーションが友人関係の構築に影響を及ぼすのかを見ていく。オリエンテーションの参加有無、内容に関する項目を独立変数にしたい。そのため、「オリエンテーション

不参加」を基準として、「学校の基本情報の説明会のみ」、「レクレーションや食事会があった」、「泊りがけであった」という内容のオリエンテーションへの参加を表すダミー変数を作成した。そして、それらの3つを独立変数とした。

「友人関係心の抛り所度」、「友人関係満足度」を従属変数として、重回帰分析をした。その結果、「友人関係心の抛り所度」を従属変数にした重回帰分析では、有意な結果が得られなかった。また、「友人関係満足度」を従属変数にした、重回帰分析でも有意な結果が得られなかった。

5 考察

5.1 度数分析の考察

一人行動に対する意識の項目について考察する。一人でいる人を見ると、寂しい人だと思わない人は約85%を占めていたが、自分が一人のところを見られるのは嫌ではない人は、約60%であり、約20%の差がある。つまり他人が一人でいることには何とも思わなくても、自分が一人でいることには否定的である人がいることが分かる。藏本(2014)の先行研究で見られた傾向が、本研究でも見出すことができた。「一人でいる所を見られるのは嫌だ」というのは、最初にぼっちの定義をしたものである。この質問項目にあてはまる人は、自分はぼっちだと感じやすい可能性がある。つまり、本調査では約40%の人がそうなる。

ひとりぼっち許容度の項目の結果の考察を行う。この回答結果から、誰かと過ごすべきだと考えられる大学内での状況が分かる。新たな環境、昼休み、サークル等の集まり、授業、休み時間という状況では誰かと過ごす方が良いという意見が特に多かった。逆にトイレや学習支援センターなどは、誰かと共に行動しなくても良いということが分かった。

付き合い方に関する項目の考察をする。「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友達を使い分ける」という項目は、本調査では約70%が肯定意見であったので、状況志向がみられる人が多いということがわかった。浅田の2002年の調査ではそして、いつも連絡を取り合わないと不安になるという回答が約1割しかおらず、また友達関係があっさりしているという回答も多いことから、友人に依存するような付き合いをする人は少ない印象を受けた。

「今、週何回、学部・学科の友人と会う機会がありますか」という質問項目に対して、1回という回答が多かった。コロナ禍のため、少なくなったということも考えられる。また授業が他の学年より少なくなる大学4年生の回答が約50%を占めていたので、1回という回答が多くなったと考えられる。

携帯電話(LINEなど)を通して連絡を取る頻度も結果から、全く連絡を取らない人は約6%であった。つまり、約94%の人が連絡を取ることがあると分かった。そしてこの項目の回答で、常に連絡を取り合うという人は約9%いることが分かっている。つまり、常に連絡を取っているわけではないが、連絡を取る人がほとんどであることが分かった。

オリエンテーションに参加したという人は約83%いたということから、ほとんどの人がオリエンテーションに参加したということが分かった。そして、オリエンテーションの内容の回答では泊りがけであった人は約9%しかいなかった。

5.2 一人行動と友人関係の重回帰分析の考察

(1)ひとりぼっち許容度と友人関係の関連の考察

重回帰分析の結果より、携帯電話での連絡頻度は、ひとりぼっち許容度に影響を及ぼしていることが分かった。携帯電話での連絡頻度が高いと、ひとりぼっち許容度が低い。一方、友人関係心の抛り所度とひとりぼっち許容度は有意な結果が見られなかった。また友人関係の満足度と、ひとりぼっち許容度にも有意な関連がみられなかった。よって、ここでは「心の抛り所となる友人関係が、一人行動に対して寛容にさせる要素となる。」(仮説①)、「満足度が高い友人関係が、一人行動に対して寛容にさせる要素となる。」(仮説②)は実証されない。

先行研究であった田中の論文では家族のきずなが強いほど、ひとりぼっち許容度は低いという結果が出ている(田中 2016)。そしてその考察では、家族のきずなが強いということは、共に過ごす時間のコミュニケーションの密度は濃くなると想像できるので、一人でいることの孤立感を強めるのではないかと述べられている(田中 2016)。本調査では「携帯電話での連絡頻度が高いと、ひとりぼっち許容度は低くなる」ということが見いだされた。携帯電話の連絡頻度が高いということは、田中の考察で述べられているように、直接会うこと以外でも、コミュニケーションを積むことになるので、孤立感をより強く感じてしまうという可能性が、本調査でも見られる。また神野、和田によると、携帯メールに依存度が高いと、孤独感が強いとあった(神野、和田 2015)。この先行研究にあるように、やはり、携帯電話での連絡頻度が高いと、ひとりぼっち許容度を低める要素となりうるということが分かる。

この結果で意外であったのは、「友人関係心の抛り所度」が「ひとりぼっち許容度」に有意な相関関係がなかったことである。「密な関係を求めるほど、より孤立感を強めていしまう」という考察からすると、「心の抛り所となる友人関係を求める人ほど、ひとりぼっち許容度は低くなる」ということが言えてもいいのではないかと思えた。

ひとりぼっち許容度が低いということは、多くの場面(授業、休み時間、昼食など)で人と過ごす方が良いと考えているということである。つまり、友人と接する「時間」の多さを重視している。よって、直接顔を合わせていない間も、携帯電話で連絡を取る時間を確保する傾向にあることが想定される。ゆえに、携帯電話での連絡とひとりぼっち許容度に関連がみられたと考えられる。

(2)一人行動に対する意識と友人関係の関連の考察

次に一人行動に対する意識と友人関係の関連を見ていく。まず「一人で行動することに不安を感じる人が多い」を従属変数として、重回帰分析した結果を考察する。友人関係心の抛り所が高いと「一人で行動することに不安を感じる人が多い」にあてはまることを弱めることが分かった。逆に、携帯電話での連絡頻度が高いことと、一人行動に不安を感じる人が多いことに、強くあてはまることがわかった。この分析結果からは「友人関係の心の抛り所度が高いと、一人行動に対する否定感が低い」と分かるので、「心の抛り所となる友人関係が、一人行動に対して寛容にさせる要素となる。」(仮説①)にあてはまる。

次に「一人でいる人を見ると寂しい人だと思う」を従属変数とした、重回帰分析の結果を考察する。友人関係の満足度が高いと、一人でいる人を見ると寂しい人だと思うことを弱めることがわかった。また、「同じ学部・学科の人とは授業がある時にしか会わない」にあてはまるほど、にあてはまることを弱めることがわかった。つまり、ここでは、友人関係の満足度が高いと一人行動に対する否定感が低いことが分かった。よって、「満足度が高い友人

関係が、一人行動に対して寛容にさせる要素となる。」(仮説②)にあてはまる。

最後に「自分が一人である所を見られるのは嫌だ」を従属変数とした、重回帰分析の結果を考察する。友人関係心の抛り所が高いことが、「自分が一人である所を見られるのは嫌だ」にあてはまることを弱めることがわかった。「同じ学部・学科の人とは授業がある時にしか会わない」にあてはまるほど、「自分が一人である所を見られるのは嫌だ」にあてはまらないことがわかった。この分析結果からは「友人関係心の抛り所度が高いと、一人行動に対する否定感が低い」ということが分かる。よって、「心の抛り所となる友人関係が、一人行動に対して寛容にさせる要素となる。」(仮説①)にあてはまる。

「一人で行動することに不安を感じることが多い」、「自分が一人である所を見られるのは嫌だ」に対しては、友人関係心の抛り所度影響していた。また「一人で行動することに不安を感じるが多い」、「一人でいる人を見ると寂しい人だと思う」に対しては、友人関係の満足度が影響していた。「一人で行動することに不安を感じるが多い」と「自分が一人である所を見られるのは嫌だ」は自分主体の行動であり、「一人でいる人を見ると寂しい人だと思う」は他人が一人であることに関する項目であった。その違いによって、友人関係心の抛り所度が一人行動に対する否定感に影響するかどうかの違いが生じた可能性もあるのではないかと考えた。

(3)性別に関して

表 7~10 の重回帰分析の結果、性別によって、一人行動に対する意識、ひとりぼっち許容度に変化がみられることはなかった。「ひとりぼっち許容度」に関しては、田中によると、男性の方が許容度が低いとあった(田中 2016)。しかし、本調査では性別は結果に影響を与える要素ではないということが言える。

5.3 オリエンテーションに関する考察

(1)オリエンテーション内容別での、オリエンテーションに対する意識の違いの考察

「学校の基本情報の説明会のみ」、「レクレーションや食事会があった」、「泊りがけであった」の順で、時間は長くなると思う。接する時間が長いほど、人と知り合うことができ、友人関係構築がしやすくなるのではないかと考えていた。そして、オリエンテーションに対する肯定感も上がるのではないかと考えていた。しかし、結果はそういうわけではなかった。

オリエンテーションで知り合った人とは、今でも付き合いがあるに対して肯定意見が約5割であった。これはオリエンテーション以外にも、サークル活動や少人数の授業(ゼミなど)で人と出会う機会があったからではないかと考える。また、サークルや授業などは、会う回数を重ねられるという利点もある。オリエンテーションのように単発のものでは、長続きする人付き合いにはつながらないのではないのかもしれない。

「学校の基本情報の説明会のみ」の場合でも、出会いの良いきっかけであったと思うと回答した人が約67%いた。親交を深めるためのレクレーション、食事会、お泊りがなくても、人と知り合うことができたようだ。これは先行研究の古田(2012)のオリエンテーションの形式に関わらず、オリエンテーションが学生同士が知り合うきっかけとなったという結果と同じであった。新しい環境では、一緒にいてくれる人を探すという行動をとる人はこの調査でも、約8割いた。ゆえに、初めて同じ学部・学科の人が一同に集まる状況下では、どん

なオリエンテーションの内容でも、それぞれが人間関係構築に積極的であったのではないかと考える。

よって、オリエンテーションはきっかけの一つではあったが、友人関係の構築において、必要不可欠なイベントであるとは言えない可能性があると考えられる。

オリエンテーションに対する意識の質問の回答が、オリエンテーションの内容によって変化するかを見てきたが、大きな変化は見られなかった。

(2)友人関係とオリエンテーションの関係

オリエンテーションが及ぼす友人関係への影響について、考察する。本調査の重回帰分析の結果からは、オリエンテーションの参加と、友人関係の満足度に有意な関連がみられなかった。またオリエンテーションの参加と、友人関係心の抛り所度にも有意な関連がみられなかった。よって、本調査では、オリエンテーション参加は友人関係に影響を与えないことがわかった。

6 結論

本調査では、友人関係が、一人行動に寛容になるための要因になるかどうかを調査した。そして調査の結果、「一人で行動することに不安を感じることが多い」、「人がひとりである所を見ると寂しい人だと思ふ」を従属変数とした時、友人関係の満足度が影響していることがわかった。そして友人関係の満足度が高いと、一人行動に対する否定感が低いと分かった。

また、「一人行動を見られるのは嫌だ」、「一人で行動することに不安を感じるが多い」という項目を従属変数として重回帰分析したところ、同じ学部・学科の友人関係の心の抛り所度が高いと、一人行動に対する否定感が少し低いということがわかった。

一人行動に対する意識項目によって、影響する独立変数が異なっている。しかし、一人行動に対して、寛容になるための要素が、友人関係の満足度と心の抛り所度にある可能性があることが分かった。個人化が進み、対人関係が希薄になっていっても、満足度の高い人間関係は重要であるのかもしれない。人付き合いにはわずらわしさもあるが、自分を受け入れて入れてくれるような、また満足感のある友人関係は必要なのかもしれない。

しかし、本調査のいずれの結果でも、その相関関係はとても弱かった。今回は、対象とした友人関係は、同じ学部・学科内ということに限定した。人によっては、他学部にも友人がいたり、大学外にも親しい友人がいる場合が想定される。また、友人と呼べる存在についても曖昧なところがある。よって、同じ学部・学科以外の友人関係が充実している場合、していない場合で、結果も変化したかもしれない。そして友人関係の満足度に関しては、約9割もの人が満足している、どちらかと言えば満足していると回答している。ゆえに、友人関係の満足度が低いという回答がもっと得られていたら、結果は変わっていたのかもしれない。

そして、本調査ではオリエンテーションの参加が、友人関係の満足度にも、友人関係心の抛り所度にも影響を及ぼさないことがわかった。つまり、泊りがけであろうが、学校の基本情報の説明会のみでのオリエンテーションであろうが、友人関係に対する影響はみられなかった。しかし、オリエンテーションは、学部・学科内の人と出会う良いきっかけであったという回答が、どのオリエンテーションを経験しても、多く得られた。ゆえに、本調査からは、友人関係づくりのため、オリエンテーションの内容に関わらず、参加をした方が良いのでは

ないかと考えられる。

そして、本調査の結果から、一回のイベントで、長く過ごすよりも、複数回のイベントを重ねることで、人の繋がり生まれやすくなるのかもしれないことが考えられる。

また今回、泊りがけのオリエンテーションを経験した人は全体の9%しかいなかった。泊りがけのオリエンテーションを経験した人から、もっと多くの回答を得られていたら、結果も変わったかもしれないということも考えられる。

本調査の問題点について述べる。友人関係の満足度は1つの項目でしか尋ねることができていなかった。そのせいか、約9割の人が満足しているという結果になってしまった。複数個の項目で満足度を測定すれば、結果も異なったのではないかと考える。そして、携帯電話での連絡頻度を測る項目も、「常にしている」、「時々している」などの選択肢であり、主観的で、曖昧な連絡頻度しか聞いていなかった。以上のような調査票の曖昧さがあった。

7 謝辞

本文執筆にあたり、ご指導いただいた立木茂雄教授、TAの川見さん、ありがとうございました。また本調査にご協力してくださった、同志社大学の学生の皆様、ありがとうございました。

参考文献

- Merton, Robert K. 1949, *Social Theory And Social Structure :Toward the Codification of Theory and Research*, U.S.A: The Free Press. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎 訳, 『社会理論と社会構造』みすず書房.
- 浅野智彦, 2006, 「若者の現在」浅野智彦編『検証・若者の変貌——失われた10年の後に』勁草書房, 233—260.
- 朝日新聞, 2014, 「(教育 2014 ぼっち学生考:上) 事象「ぼっち」の予防線/東京都“(2019年12月11日取得, <http://database.asahi.com/lobrary2/topic/t-detail.php>)
- 藏本知子, 2014, 「女子大学生の「ひとりぼっち恐怖」に関する探索的研究:「世間」との関連を通して」『人文』12: 103—118.
- 古田雅明・中村紘子・香月菜々子〔他〕, 2012, 「新入生オリエンテーションに対する学生による評価の分析」『人間関係学研究:社会学社会心理学人間福祉学:大妻女子大学人間関係学部紀要』14: 59—70.
- 石田光規, 2018, 『孤立不安社会——つながり格差、承認の追求、ぼっちの恐怖』勁草書房.
- 伊藤美登里, 2017, 『ウルリッヒ・ベックの社会理論——リスク社会を生きるということ』勁草書房.
- 稲垣応顕・長谷川雅樹・松井理納, 2015, 「大学生の友達意識に関する縦断的研究——中学生時代との比較」『上越教育大学研究紀要』, 34: 35—44.
- 神野美智男・和田裕一, 2015, 『青年期のケータイ・メールと孤独感』6(1):11-21
- 内閣府政策統括官(共生社会政策担当), 2009, 「第8回 世界青年意識調査 (HTML)」, 内閣府ホームページ, (2020年1月23日取得 <https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/2-7-1.html#1>).
- 中西新太郎, 2004, 『若者たちに何が起きているのか』花伝社.
- 永井徹, 1994, 『対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析』サイエンス社
- 大久保智生, 2010, 『青年学校適応に関する研究:関係論的アプローチによる検討』ナカニシヤ出版.
- , 青柳肇, 2003, 「大学生用適応尺度の作成の試み——個人—環境の適合性の視点から」『パーソナリティ研究』1:38—39.
- 大嶽さと子・吉田俊和, 2008, 「「ひとりぼっち回避規範」に関する一考察」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』55: 179-186.
- ・多川則子・吉田俊和, 2010, 「青年期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する捉え方の発達的变化:面接調査に基づく探索的なモデル作成の試み」『対人社会心理学研究』10: 179—185.
- 田中美穂, 2016, 『ひとりぼっち許容度と家族意識の関連性について』同志社大学社会学部社会学科2016年度卒業論文
- 辻大介, 2009, 「友だちがいないと見られることの不安」『月刊少年育成』54(1): 26-31.
- 吉川千尋, 2013, 『大学生の持つ“ひとり”の認識~積極的孤独と消極的孤独~』名古屋大学高等教育センター

